

13	学校名 東京都東村山市立久米川東小学校	R1~R4
----	---------------------	-------

令和4年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

外国語科・外国語活動と各教科等との統合を図った CLIL（内容言語統合型学習）を用いた指導方法を取り入れた研究開発を行い、他者とのコミュニケーションの基盤を育成する学習活動を展開するとともに、創造的思考や感性・情緒等を踏まえた学習活動を展開する中で、英語に触れながら考えたり表現したりすることを通し、豊かなコミュニケーション能力の育成と各教科等における質的学力の向上を目指す。

そのために、外国語学習と各教科等の内容を統合させ、そこに深い学びを促す創造的思考や自分の思いや考えをいきいきと表現する感性・情緒等を踏まえた、小学校6年間のカリキュラムとして編成された新教科「eタイム」を創設する。

（※CLIL（内容言語統合型学習）：Content and Language Integrated Learning）

2 研究開発の概要

外国語科・外国語活動では、外国語（英語）を用いて考えたり、理解したりする①知的活動としての創造的思考や、外国語（英語）を通して言葉の美しさや温かさに触れたり、伝え合うことで人間関係が豊かになったりする②感性・情緒等も踏まえた学習を実現する必要がある。そのためには、外国語科・外国語活動の改善を図るとともに、児童が各教科等における学びを通して獲得した知識・技能を実際のコミュニケーションにおいて活用し、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて知識が獲得され、学習内容の理解を深めるなど資質・能力を相互に関連させながら育成を図る取組が重要である。

そこで、本研究では、外国語科・外国語活動と各教科等をつなぐ役割を担う新教科「eタイム」を設置し、教育課程の編成、授業における指導方法及び評価計画の研究に取り組み、実践した。

3 研究開発の内容

（1）研究仮説

児童の興味・関心や特性に応じて、外国語学習と各教科等の学びを統合し、CLIL（内容言語統合型学習）における指導方法を研究することで、各教科等の内容を取り入れた多様な学習場面において、児童は自分の興味やよさを生かしながら、外国語（英語）を通してコミュニケーション活動を主体的に行うことだろう。また、その主体的な学びを生かすことで、慣れ親しむ学習が中心となる小学校と、言語理解をより正確にする中学校との円滑な接続を果たすことができるだろう。さらに、CLIL（内容言語統合型学習）の特質である「学習課題を自分の事として捉えながら課題解決を行う」中で、豊かなコミュニケーションを図るための実践を通し、外国語学習におい

て育成を目指す資質・能力を身に付けることができるだろう。

(2) 教育課程の特例

- ①第1・2学年では、地域の生活や社会及び自然に関わること、具体的な活動を通して気付いたことや考えたことを英語で表現することを重視するため、生活科より25時間を新教科「eタイム」に充てた。
- ②第3・4・5・6学年では、各教科等における見方・考え方を総合的に働かせながら、「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」という探究的な学習を展開させていくため、総合的な学習の時間より35時間を新教科「eタイム」に充てた。
- ③新教科「eタイム」の目標と育成する資質・能力は以下の通りに設定した。

〈目標〉

各教科等における見方・考え方を働かせ、英語で学び英語で伝える言語活動を通して、自分の身近なことや世界的な問題を自分に関係のあることとして捉え、コミュニケーションを通じて周囲と協力しながら解決しようとする力である「国際力」を育成する。

〈国際力を育むための資質・能力〉

○英語活用力

【第1・2・3・4学年】

- ・外国語を通して、身近なことや世界的な問題について知るとともに、そこで思ったことや考えたことを伝えたり聞いたりする外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しみ、それらを使って思いや考えを伝え合う力の素地を養う。

【第5・6学年】

- ・外国語を通して、身近なことや世界的な問題について知るとともに、そこで思ったことや考えたことを、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる英語力を身に付け、それらを使って思いや考えを伝え合う力の基本的な力を養う。

○自己分析力

- ・外国語を通して、捉えた問題についての理解を深めるとともに、自分にとって身近なことと照らし合わせて考えを深められるようにする。

○実行力

- ・捉えた問題の中から自分の課題を見だし、学んだことを生かしながら、自分なりの解決方法を考えたり、選択したりできるようにする。

④教育課程の編成について

英語を母語としない者同士が英語を共通言語としてコミュニケーションするための資質・能力を身に付ける学習方法 CLIL（内容言語統合型学習）(Contents and Language Integrated Learning)をもとに新教科「eタイム」を実践することで、外国語（英語）における「聞く・話す・読む・書く」を偏りなく学ぶことに繋げる。また、各教科等の内容と外国語科・外国語活動で学んだ言語（英語）の力を生かして学習活動を展開するために CLIL（内容言語統合型学習）学習の形態を調整することを通し、SDGs の視点を踏まえた内容を取り入れることで、児童の主体的な学びを促しより言語理解の伴った外国語（英語）の力を身に付けていくことをねらいとして教育課程を編成した。

⑤CLIL（内容言語統合型学習）の基本原理

CLIL（内容言語統合型学習）とは、Content（内容）、Communication（言語）、Cognition（思考）、Community/Culture（協学/文化）の4Cにわたる知識や能力を言語活動によって統合的に育成する教育であり、コミュニケーション能力や思考力、判断力、表現力等を高めることにつながると考えられる指導方法である。本校では、CLIL（内容言語統合型学習）の指導法を用いながら、英語で学び英語で伝える言語活動を通じて、豊かなコミュニケーション能力の育成を図る新教科「eタイム」を実施した。

○Content（内容）

外国語の学習内容と各教科等の学習内容を統合する際、児童の興味・関心を促す内容を取り入れることで、児童の発達段階に沿った主体的な学習への動機を高め、豊かな言語活動へとつなげることができる。本校では、国立教育政策研究所が示す「持続可能な社会づくりの構成概念（例）」を基に、SDGsの視点を踏まえることで、児童が学習内容について、共通の課題をもつことや世界で起こる様々な問題を自分との関わりの中で捉えることが可能となり、自分の思いや考えを英語でのコミュニケーションを通して、他者と協力しながら解決していこうとする児童を育成していくことを目的としている。

○Communication（言語）

CLIL（内容言語統合型学習）は、言語の学びを要するため、児童の「聞きたい!」「使いたい!」という思いを引き出しながら、目的や場面、状況などを意識したコミュニケーションとなるよう、汎用性や馴染みやすさを意識しながら、身に付けさせたい語彙・表現を決定する。

○Cognition（思考）

学習活動を通して、言語と思考の学びを深めることができるように、学習活動を設定する際、児童が語彙・表現を獲得するまでの思考を明確に設定する。

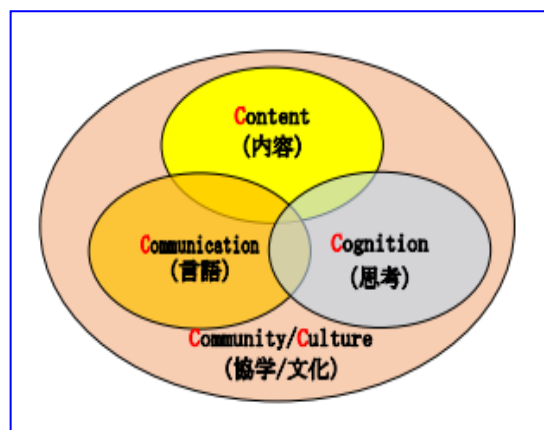
※思考力の高まり（例）記憶→理解→応用→分析→評価→創造

○Community/Culture（協学・文化）

学習活動を通して、児童が得た情報や考えたことが、異文化理解や国際理解につながるよう、協働学習を行う際、学習規模を広げ、様々な人々との交流機会を意図的に設定する。

⑥CLIL（内容言語統合型学習）の4Cの関わり（例）

CLIL（内容言語統合型学習）における4Cを意図的・計画的に統合しながら授業づくりを行っていくことが重要となる。例えば、Content（内容）とCommunication（言語）を統合する際、Cognition（思考）を働かせることに加え、Community/Culture（協学/文化）を明確に設定した授業づくりを行うことで、内容、言語、思考の場面において、学びを広げていくことが可能になる。

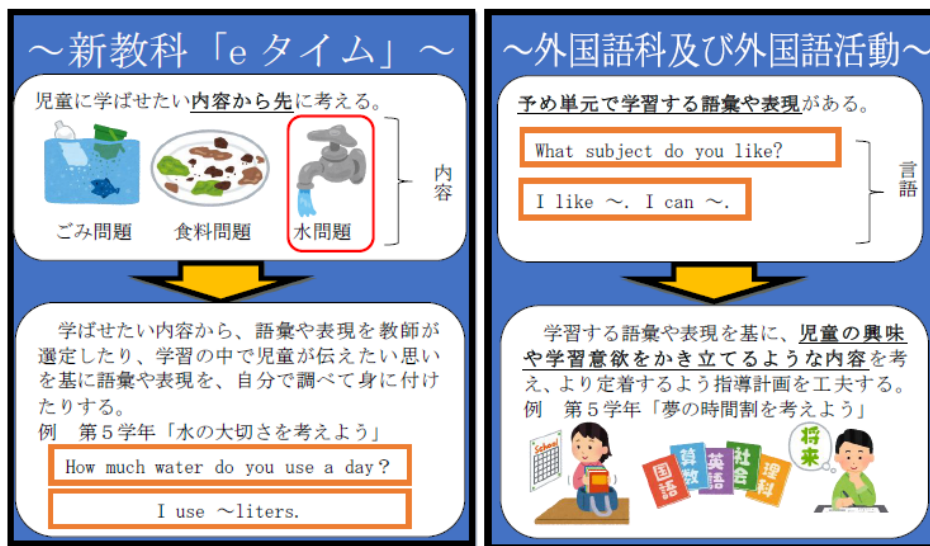


(3) 研究開発にあたり配慮した事項・問題点

新教科「e タイム」では、言語学習と教科内容を統合させ、そこに思考活動と協働学習、異文化理解を取り入れ、児童の体験的な学習を促進する指導方法を通して、児童が多様な文化や価値観をもつ他者と関わり、目的に応じて、思いや考えを試行錯誤して伝えようとするなど、児童の英語活用力や豊かなコミュニケーション力の更なる育成を図ることができるよう、以下の3点に配慮して研究開発を行った。

① 単元づくりの工夫

新教科「e タイム」における単元づくりを行う際は、外国語科及び外国語活動における単元づくりの違いを明確にするとともに、身に付けさせたい資質・能力の育成に向け、CLIL（内容言語統合型学習）における4Cとの関わりを意識した内容とした。以下に示す「内容の構築」「言語材料の精選」「単元の構成」の視点を踏まえ、単元づくりを行った。



内容の構築

環境・自然・文化・日常等から、児童に学ばせたい内容や考えさせたい事柄を決めた。また、児童に学ばせたい内容や考えさせたい事柄がSDGsの視点とどのように関連できるのか、結び付けながら内容を精査した。

【SDGs との関連】



言語材料の精選

構成した内容を基に、児童に身に付けさせたい語彙や表現、単元の中で自分の思いや考えを伝えるために必要な語彙・表現を精選した。言語材料は、できるだけ外国語の学習や他の単元でも生かせる汎用性のある語彙や表現となるよう留意した。

単元の構成

構築した内容から課題を捉え、自分にとって身近なものと照らし合わせて考えながら、学んだことを生かし、自分なりの解決方法を考えたり、選択したりする力が身に付くよう、各教科等の内容を統合し、単元を構成した。

②ICT 機器の利活用

児童の学習を通しての言語を大事にしたいと考え、ICT 機器（タブレット型端末や電子辞書）を活用した。教師から与えられた単語だけではなく、児童一人一人が考えながら単語や表現を調べることができるようになり、以下のような効果を検証することができた。

- ・英語での機能に加えて、各教科等における内容について調べることができ、児童の伝えたい思いや表現の願いに応えやすい。
- ・その場で発音を確かめることができ、児童自らが、発話に繋げやすい。
- ・調べた語彙や表現を書き写すなど、「読むこと・書くことの慣れ親しみ」に繋げやすい。

③遠隔教育システムの活用

鮮明な映像や教室全体に広がる音声等の高い機能をもつ遠隔教育システムを活用し、複数の児童が同時に会話を行いながら、学校・地域・県・国等の特徴を伝え合う活動を設定した。具体的には、静岡県川根本町の小学校と本校とで、CLIL（内容言語統合型学習）の授業を同じ単元指導計画で行い、単元末のパフォーマンス場面において、テーマに基づき発表し合うことを通して、児童は、異なる文化や価値観をもつ他者との関わりを通して、自分や他者のよさに気付いたり、協働的に取り組んだりした。

問題点としては、以下の視点で示すように、児童の発達段階や習熟の程度に応じて、授業形態を毎時間意図的・計画的に調整することであった。

CLIL（内容言語統合型学習）における授業形態

- ・目的…Soft CLIL（内容言語統合型学習）（語学中心） ⇔ Hard CLIL（内容言語統合型学習）（教科内容中心）
- ・頻度…Light CLIL（内容言語統合型学習）（単発的・少数回） ⇔ Heavy CLIL（内容言語統合型学習）（定期的・多数回）

4 研究開発の結果及びその分析

児童・生徒への効果

(1) 国際力を育む三つの資質・能力の変容について

○英語活用力について

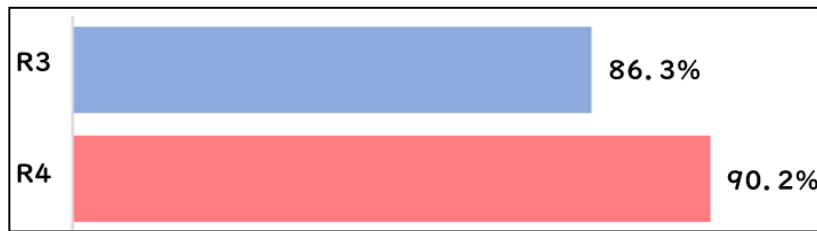
- ・英語を話したり聞いたりすることができる。



- ・肯定的な回答の割合は2.8ポイント増加。
- ・外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんだり、実際のコミュニケーションにおいて活用したりできる英語力の育成を図ることができた。

○自己分析力について

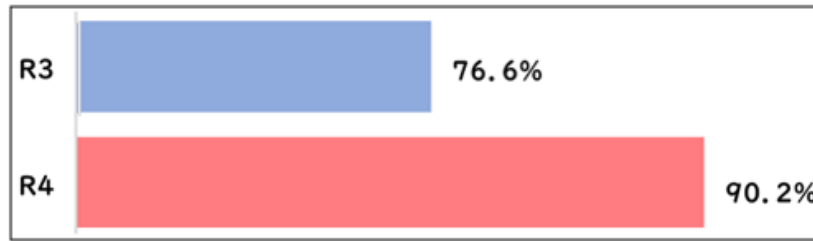
- ・自分や相手の意見の似ているところや違うところ分かる。



- ・肯定的な回答の割合は3.9ポイント増加。
- ・学習内容を既習や自身の経験と照らし合わせたり、結び付けたりしながら理解した上で、自己の考えを形成する力の育成を図ることができた。

○実行力について

- ・学んだことをこれからの生活に生かそうとする。



- ・肯定的な回答の割合は13.6ポイント増加。
- ・児童が学習課題を自分との関わりで捉え、課題解決に向けできることを自分なりに見だし、解決方法を考えたり、選択したりする力の育成を図ることができた。

(2) CLIL（内容言語統合型学習）の指導方法を用いた新教科「eタイム」の授業

- ・国際力を育む三つの資質・能力（英語活用力、自己分析力、実行力）を意図的・計画的に育む上で、外国語学習と各教科等の内容を統合する単元開発を行った。その際、児童が学習課題を自分との関わりで捉えることができるよう、SDGsと関連を図ったカリキュラムを開発し、系統的に実施したことにより、課題解決に向けて、教科横断的な思考を働かせたり、真に「考えたい」「行動したい」という自分の思いや考えを英語で伝え合ったりすることができるようになった。
- ・CLIL（内容言語統合型学習）における4Cを意図的・計画的に統合しながら授業づくりを行ったことで、児童は、英語における「聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと」に関する学習をバランスよく行うことができた。
- ・ショート「eタイム」では、外国語活動の内容とロング「eタイム」の内容を関連付けながら実施したことで、児童が既習の語彙や表現に慣れ親しんだり、内容の定着を図ったりすることができた。
- ・遠隔教育システムを活用し、英語で他県の児童とコミュニケーションを図ったこ

とで、互いの文化や価値観について理解することや自分たちの学校や地域等のよさを見つめ直すことにつながった。

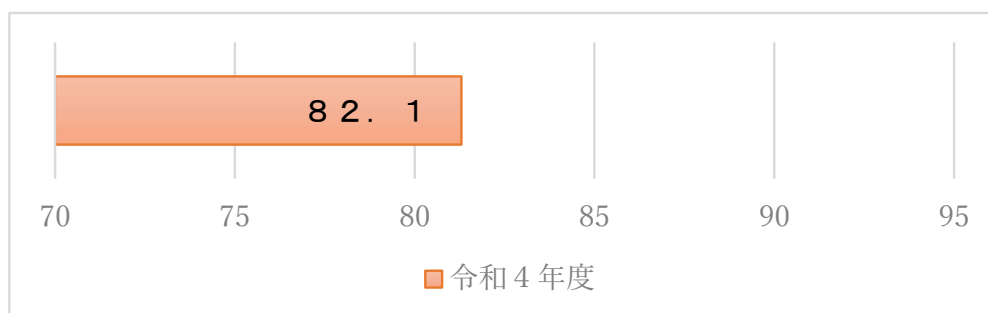
2 教員への効果

- ・ 外国語学習と各教科等における内容の統合を図りながら、教科横断的な視点でカリキュラム開発を行ったことで、児童理解を深め、教員一人一人の授業改善を図ることができた。
- ・ 校内研修の充実を図ったことで、クラスルームイングリッシュに加えて、授業の中で活用できる語彙が増え、一単位時間における新教科「e タイム」の授業において、概ね英語で行うことができるようになった。

3 保護者等への効果

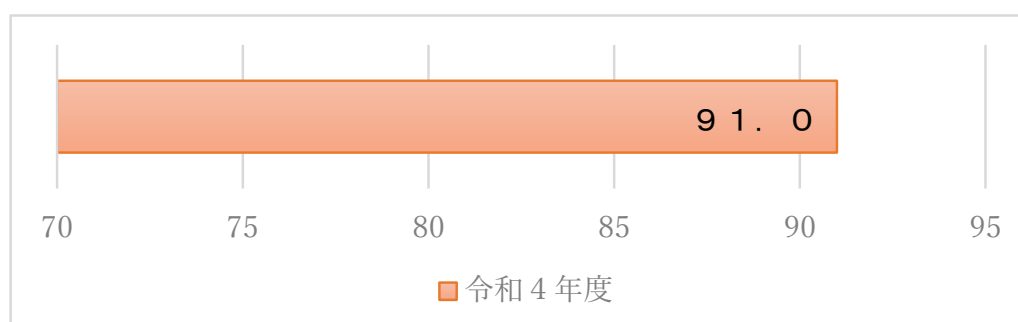
以下のグラフは、令和4年度の学校評価の中で新教科「新教科「e タイム」」の授業における質問紙調査結果において、肯定的な回答の割合をまとめたものである。

○新教科「e タイム」の学習を通して、お子さんに英語を話したり聞いたりする力が身に付いている。



- ・ 「新教科『e タイム』の学習を通して、お子さんに英語を話したり聞いたりする力が付いている」について肯定的な回答が約8割、「新教科『e タイム』の学習は、お子さんにとって有意義であると思う」について肯定的な回答が約9割であった。
- ・ 「新教科「e タイム」」の授業公開を行うなど、保護者に「新教科「e タイム」」の取組を伝える機会を設定してきたことで、「学習課題を自分との関わりの中で捉え、英語でコミュニケーションを図りながら、他者と協働して課題解決を行う」という新教科「e タイム」における研究開発の意図を理解した上で肯定的な回答をしていることが伺える。

○新教科「e タイム」の学習は、お子さんにとって有意義である。



5 今後の研究開発の方向性

(1) 新教科「e タイム」の授業についての課題

- ・児童が英語で内容を学ぶ上で大切なことは、英語に対する苦手意識をもたせないことである。シンプルな語彙や表現を使用するとともに、教員が様々な場面においてフィードバックを行い、児童が英語を活用することで得られる達成感や成就感を身に付けさせるための工夫が必要である。
- ・児童が学びたい内容から選定した表現を目的・場面・状況と結び付けながら獲得できるよう、教師がコミュニケーションの場面を適切に設定する必要がある。
- ・児童は、統合を図った各教科等における見方・考え方を働かせながら探究的な学習を行うことはできていたが、そのことが各教科等の場面においてどのように生かされているのかを検証する必要がある。

(2) 新教科「e タイム」を実施する上での課題

- ・教員の英語力については個人差が生じやすく、新教科「e タイム」で必要とされる教員の英語力を研修等で計画的に身に付けさせていくことが重要である。
- ・単元を構想する上で、系統的な学習内容について検討したり、教材研究や授業準備を行ったりするための時間を十分に確保することが求められる。

(3) 今後の展望

4年間の研究開発において、CLIL（内容言語統合型学習）の指導法を用いた新教科「e タイム」を中核とした教育課程のよさや、本校で大切にしたい資質・能力の発揮・育成を目指す外国語学習カリキュラムは、現行学習指導要領の教育課程の枠組に戻しても、その理念は受け継ぐことができると考える。

令和5年度は、現行の学習指導要領の教育課程の枠組みに戻し、新教科「e タイム」における学習内容を外国語科・外国語活動や総合的な学習の時間等で扱っていく予定である。新教科「e タイム」の教育効果を各教科等においてどのように生かしていくかを検討していくとともに、新教科「e タイム」を通して表れた児童のいきいきと表現する姿が各教科等々の学習において発揮されるよう、さらに研究を深める必要がある。また、指導する教員にとって無理になっていないか等の検証も行い、外国語学習カリキュラムの見直しを行っていく。

東村山市立久米川東小学校 教育課程表（令和4年度）

	各教科の授業時数										特別の教科である道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	新設教科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語						
第1学年	306		136		67 (-35)	68	68		102		34	10 (+10)		34	25 (+25)	850 (+0)
第2学年	315		175		70 (-35)	70	70		105		35	10 (+10)		35	25 (+25)	910 (+0)
第3学年	245	70	175	90		60	60		105		35	35 (-35)	35	35 (+35)	35	980
第4学年	245	90	175	105		60	60		105		35	35 (-35)	35	35 (+35)	35	1015
第5学年	175	100	175	105		50	50	60	90	70	35	35 (-35)	35	35 (+35)	35	1015
第6学年	175	105	175	105		50	50	55	90	70	35	35 (-35)	35	35 (+35)	35	1015
計	1461	365	1011	405	137 (-70)	358	358	115	597	140	209	90 (+20)	140 (-140)	209	190 (+190)	5785 (+-0)

学校等の概要

1 学校名、校長名

ヒガシムラヤマシシリックメガワヒガシショウガッコウ
東村山市立久米川東小学校

アシザワ シゲキ
校長 芦沢 茂樹

2 所在地、電話番号、FAX番号

東京都東村山市久米川町2丁目40番地10
電話 042-391-8193
FAX 042-397-5413

3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

令和4年12月1日現在

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
83	3	79	3	76	3	83	3	84	3	89	3	494	18

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	2	0	24	0	1	0	0	3
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	2	1	37						